法政大学

EToS

江戸東京研究センター

Hosei University Research Center for

Edo-Tokyo Studies

2018 vol.2

②

法政大学
HOSEI University

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
2-17-1 Fujimi Chiyoda-ku Tokyo, JAPAN

文部科学省補助金私立大学研究ブランディング事業
「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」

表紙の図版（上から）：
「天保御江戸大地図（1843年）」国立国会図書館
「国土地理院航空写真（2007年）」国土地理院
「参謀本部陸軍部測量局 五千分ー東京図測量図（1884年）」の複製(一財)日本地図センター
「ソリッド・ボイド・マップ（2018年）」法政大学北山研究室製作

目次

マニフェスト 2

江戸東京研究センター（EToS）の1年の活動を振り返って 3
江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授　横山泰子

4つの研究プロジェクト

① 水都ー基層構造 4
② 江戸東京のユニークさ 5
③ テクノロジーとアート 6
④ 都市東京の近未来 7

2018年度事業報告

シンポジウム・研究会
特別対談企画「日本問答・江戸問答」 8
研究会「記号上の復興ーエフェメラが形成する戦後東京像」 9
研究会「江戸東京の名所研究ー課題を共有し、可能性を考えるー」 10
国際シンポジウム「風土（FUDO）から江戸東京へ」 11
研究会「アートとテクノロジーでみる江戸東京」 12
研究会「江戸周辺地域の広域支配」「江戸の都市統治と身分制」 13
研究会「立原道造ー故郷を建てる詩人」 14
研究会「近代東京名所研究の課題～史資料に表現された江戸東京」 15
シンポジウム「アートと東京」「文学と東京」 16
研究会「隅田川をさかのぼる福神の系譜ー大田南畝文・鳥文斎栄之画『かくれ里の記』までー」 17

学内外・地域活動 18
シンポジウム「水の都市と持続可能な発展 ヴェネツィアと東京」／シンポジウム「江戸文化×デザインエンジニアリングの可能性」／シンポジウム 朝日教育会議「江戸から未来へ アバター for ダイバーシティ」／第9回外濠市民塾「いま、外濠をどうするのか?～浚渫からかいぼりへ～」／シンポジウム「水系と音風景が繋ぐ 善福寺池と小菅村～土地の記憶の発掘・継承・発信～」／多摩から江戸・東京をつなぐ水循環の保全と再生 第３回シンポジウム「市民が選ぶ玉川上水と分水網の関連遺構100選～玉川上水・分水網にまつわるお宝をみんなで次の世代に伝えていきませんか～」／FCLT江戸東京国際ワークショップ「都市の文脈に挑戦する」／建築フォーラム「都市東京の近未来：２つのインテルヴェント＞マクロな都市（再）開発とミクロなまちづくり」／キックオフ・ミーティング「法政大学生・付属校生の江戸東京チャレンジー法政のみんなで江戸東京の研究をはじめよう！ー」／講義「東京MAP」の作成／プロジェクト「東京発掘プロジェクト 水辺編」／講義「フィールドワーク」／講義「都市史」

著書・論文・その他 24

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature, history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally and spatially, and derives from them a method and theory for constructing sustainable global communities. It is a learning research base where that wisdom is nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of global communities.

江戸東京研究センター（EToS）の1年の活動を振り返って

江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授
横山泰子

法政大学江戸東京研究センター（EToS）の研究活動は、
1）センター全体で実施する研究ブランディング事業
2）各研究プロジェクトが進める研究事業　を組み合わせながら行っている。

センター全体としては、
・大学と付属中高、ならびに地域をつなぐ活動
・外濠市民塾や佐原市等、学外の活動団体との連携活動
・総長の企画による対談、座談会　などを行った。

田中優子総長からは、センターの研究活動において「研究成果を社会に広く還元すること」「すみやかに出版物をつくること」の2点を重視するよう要請された。研究メンバーが常にこの2点を念頭に置き、研究活動を進めた甲斐があり、センター全体としても各プロジェクトとしても、「研究成果を社会に広く還元」し、「出版物をつくる」方向を打ち出すことができた。例えば、4月21日に開催した「日本問答・江戸問答」（後援 岩波書店、編集工学研究所）では、田中優子総長と松岡正剛氏のレクチャー、陣内秀信氏を交えた対談を行い、従来の研究会の枠組みを超えた大型イベントとして実現することができた。また、12月9日には朝日新聞社主催の「江戸から未来へ アバター for ダイバーシティ」で、田中優子総長と池上英子氏のレクチャー、柳家花緑氏を交えたパネルディスカッションを行った。研究者の研究活動を社会に還元する事業は、大学単体で行うよりも出版社や新聞社などの協力を得た方がさまざまな面で効率的であるが、この2つの企画は総長のリーダーシップによるブランディング事業であることを示したうえで意義深いものとなった。

大きな事業を行うことで、新たな出会いが生まれたのも今年度の成果である。国際記念シンポジウムの縁で、『歴史REAL 大江戸の都市力』（洋泉社、2018）の刊行の協力、公立大学産業技術大学院大学からの依頼でフォーラム「江戸文化×デザインエンジニアリングの可能性」を開催することができた。江戸東京研究センターが少しずつ社会に知られるようになるにつれ、年度当初は計画になかった他大学や他機関などから協力の依頼や問い合わせが増え、タイアップ事業をその都度、活動に組み入れることとなった。研究計画を立てて粛々とこなすだけでなく、多様な事態に対して柔軟に対応する姿勢が常に求められる。「研究成果を社会に広く還元する」ために、メンバー一同が未経験の出来事を対処する力が毎回、必要とされる。本センターの性格上、社会と対話する力は常に求められ、鍛えられることになるであろう。
学外に向けて多彩な研究活動を進めているが、総合大学としての法政大学全体で江戸東京研究センターの活動がよく知られているかというと、必ずしもそうではないように思われる。ブランディング事業は、学内外に向けて行われる必要がある。派手な大型企画はもとより、地道な活動もよりいっそう積み重ねていきたいと考えている。

1

Project 1

水都ー基層構造

多様な水の空間の類型化と可視化

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー　高村雅彦

江戸東京研究センター（EToS）の「水都ー基礎構造」のプロジェクトでは、江戸東京が長く生き続けるその理由と意味を解き明かすために、これまであまり注目されてこなかった古代・中世から綿々とつながる大地や自然と結び付いた都市と地域の基層構造の解明を追求している。平成30年度は、水都の基層構造の研究を深めるために、江戸東京における多様な水の空間の類型化について、具体的な対象に焦点をあてながら明らかにすることを目標とした。成果としては、古代からの自然環境と密接に結び付く水の聖地と信仰・遊興の空間、庭園を中心とした水と緑の空間の継承の意味、また古墳と現代東京の関係、住宅地の歴史的な形成に関する研究を実施し、それらの成果を14本の論文、発表を通じて公開することができた。2019年3月には、府中にて古代中世のシンポジウムも開催する。

また、学内における3キャンパスならびに付属中高による教育研究プロジェクトを実施し、加えて東京を対象としたアクティブラーニング形式の講義を複数開設して、当センターのインナーブランディングの普及と形成に努めた。一方、外濠を対象に、周辺に在住・在職する市民や立地する企業、地元の中学・高校や商店会が一体となって地域の将来に取り組む「外濠市民塾」を活発化させて、外部との連携も図った。

こうした活動を通じて、現代の東京の価値を水の視点から再発見し、実践的なアクションを展開することでブランディングの形成につなげていくことが、最終的に期待される成果であり目標である。空間やモノに時間軸を入れて考える方法を徹底しながら、水都としての東京のこれからをより豊かに持続させるための成果が結実することを目指していく。

平成31年度は、都市と地域の領域、いわゆるテリトーリオと文化的景観に焦点をあてて研究を進めることを目標に置いている。これまでの研究で、江戸東京のいわゆる中心部だけでなく、対象の範囲をより広く捉えて考察しなければならないということが明らかになった。江戸市域に限定せずに、その繁栄を支えた後背地や近郊農村をつなげて分析する方法を用いて、江戸東京の全体を水と地域形成の視点から再読していくことを計画している。

Photo by Hiroshi Aoki

高村雅彦

1964年生まれ。専門はアジア都市史・建築史。法政大学大学院博士課程修了。博士（工学）。前田工学賞、建築史学会賞を受賞。編著に『タイの水辺都市 天使の都を中心に（水と<まち>の物語）』法政大学出版局（2011）、『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』山川出版社（2000）などがある。

2

Project 2

江戸東京のユニークさ

江戸東京の名所・景観研究

江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授、プロジェクトリーダー　横山泰子

江戸東京研究センター（EToS）の各研究プロジェクトは、平成30年度4月からのスタートとなった。そのなかで「江戸東京のユニークさ」の研究活動は、主に以下の３つに分けられる。

1 他の研究チームならびに学内外の研究者と協力しながら行う大規模なシンポジウム

「風土（FUDO）から江戸東京へ」（7月7日、8日）
「追憶のなかの江戸ー江戸は人びとの記憶のなかでどのような都市として再構成されたのかー」（2019年2月20日、21日）

2 「江戸東京の名所」等のキーワードをもとにした、学内外の研究者による小規模な研究会

「江戸東京の名所研究」（6月23日）
「江戸周辺地域の広域支配」「江戸の都市統治と身分制」（9月29日）
「近代東京名所研究の課題」（11月15日）
「隅田川をさかのぼる福神の系譜」（11月30日）

3 地図を研究対象とする研究者によって進められる、江戸東京の地図研究

ブランディング事業であるため研究成果を広く社会に公開することを念頭に、研究者のみを対象としないよう、以上の内容を企画した。おおむね当初の計画通り、実行されている。シンポジウムは学内外の研究者を広く招き、他大学、他機関との連携の場として重要であるが、参加者のアンケートを見ても「多様性」が評価されている。小規模な研究会について平成30年度は「名所」をひとつのキーワードとして開催してきたが、他の研究プロジェクトのテーマと大きく関わる内容でもあり、平成31年度以降は別のかたちで発展させる道を考えたい。地図研究については、浮世絵等の資料をもとに江戸東京の名所の変遷について地道な作業を積み重ねている。着実に文理融合的な基礎研究が進められている。

平成30年度はスタートの年であり、研究成果を出版物等でかたちにするのは平成31年度以降の課題とする。「江戸東京のユニークさ」の研究活動は、他の研究チーム以上にメンバーの専門領域が多様であり、それゆえの強みをもつ。その一方で、研究を進めていくにつれ、方法論の違いなどが明らかになり、対話の難しさと可能性の両方が感じられた1年であった。成果の出し方についても、ウェブサイト上での情報公開を行いながら、シンポジウム等で得られた知見は報告書や一般書籍として紙媒体で世に出していくことを考えている。

横山泰子

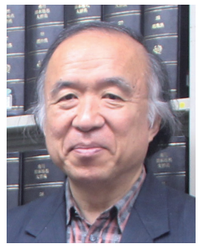
1965年生まれ。専門は日本近世・近代の怪談文化。国際基督教大学大学院博士課程修了。博士（学術）。日本古典文学会賞受賞を受賞した『江戸東京の怪談文化の成立と変遷ー一九世紀を中心にー』風間書房（1997）のほか、主な著書に『綺堂は語る、半七は走る』教育出版（2002）、『妖怪手品の時代』青弓社（2012）などがある。

③ Project 3 テクノロジーとアート

選定された各代表例の実証的な調査

法政大学文学部教授、プロジェクトリーダー　安孫子 信

平成30年度、江戸東京研究センター（EToS）の第3グループ「テクノロジーとアート」では、内外の研究者の協力を得て、「大澤啓氏を囲む研究会：記号上の復興ーエフェメラが形成する戦後東京像」（5月31日）、シンポジウム「風土（FUDO）から江戸東京へ」（7月7日、8日）、「白石さや氏を囲む研究会：アートとテクノロジーでみる江戸東京」（7月27日）、「岡村民夫氏を囲む研究会：立原道造ー故郷を建てる詩人」（10月26日）、シンポジウム「アートと東京」「文学と東京」（11月24日、25日）などの研究集会を実施し、今後もシンポジウム「テクノロジーと東京」（2019年3月30日）を予定している。また年度内にシンポジウムの2つの報告書（①「風土（FUDO）から江戸東京へ」、②「アートと東京」「文学と東京」）が刊行される。研究の初年度ということもあり、深くテーマを掘り下げるよりも、「テクノロジーとアート」の卓越した場である東京を限りなく多面的に照射することを試みた1年だったということができる。そもそもが海であったこの場所に人が住み始めたことから始まり、近代に限っても、明治維新の内戦、関東大震災、戦災といった天災・人災による壊滅的な破壊を潜り抜け、また、江戸幕藩体制から天皇制、天皇制から民主制といった、政治制度の激烈な変動のなかでも常に中心であり、さらに、維新後にはヨーロッパ文明の、ついで終戦後にはアメリカ文明の圧倒的な流入を受け入れ消化し尽して、東京は東京であり続けてきた。すなわち、そこで生活（テクノロジー）と文化（アート）とを創造的に、あるいは少なくとも特徴的に紡ぎ出してきたのである。その東京とは何かを、質的研究の極致であるが、各研究集会では、国際的また学際的に多様な、年間で延べ30余名の専門家たちに、腹蔵なく闊達に語っていただいた。そのなかで、生活（テクノロジー）と文化（アート）を生み出し続けているダイナミズム（流動）のカギは、〈風土と人間〉・〈近代と脱近代〉・〈受容と抵抗〉・〈脱中心化と再中心化〉・〈時間化と空間化〉といった二項として、多様に、それぞれ説得的に、描き出されていったが、それをより実証的に精緻に示していくことが、平成31年度以降の課題となっていくであろう。



安孫子 信

1951年生まれ。専門は哲学、フランス思想史。京都大学大学院修了。主な編著書に『Mécanique et mystique』OLMS (2018)、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』書肆心水（2016）、『Bergson, le Japon, la catastrophe』PUF（2013）、『デカルトをめぐる論戦』京都大学出版会（2013）などがある。

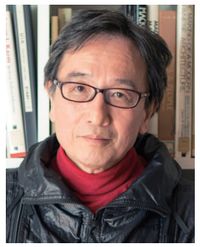
④ Project 4 都市東京の近未来

世界の次世代都市研究拠点との連携、都市問題の確認、東京近未来研究の位置付け

法政大学デザイン工学部教授、建築家、プロジェクトリーダー　北山 恒

江戸東京研究センター（EToS）に設ける、「都市東京の近未来」プロジェクトは、江戸東京という巨視的視座をもって、東京という都市の近未来に関わる新たな知見を探ろうとするものである。江戸から東京に変わる150年前の明治維新では、それまでには存在しないヨーロッパの社会システムを一気に導入する社会実験が行われた。それを「近代化」というのだが、1868年の明治維新を挟む江戸東京の地図、「天保御江戸絵図」（1843）と「参謀本部陸軍部測量局」（1884）を見ると、測量技術はほぼ同じであるが、その表記法が大きく異なることで、都市空間の認識に変更があったことがわかる。そして、都市空間に決定的な影響を与えたのが1873年の「地租改正」であった。この政令によって、それまでは社会的共通資本であった土地が私的財産となり、市場のなかで売買できるものとなる。「土地の私有制と自由な市場」がマーケットメカニズムに対応する“現代都市”の原理であるが、明治初期にその制度設計が行われていたのである。現代の東京という都市は、近代以前の江戸の基層構造をもちながら、経済活動の現場として生成変化を続けている。

平成29年度は、この生成変化を続ける都市東京を研究する展覧会とシンポジウム、「続・TOKYO METABOLIZING」を、現代東京の研究拠点である東京工業大学と横浜国立大学と共同で行った。平成30年度は、7月に「CHARENGE FOR THE URBAN FABLIC」というテーマで、法政大学、トリノ工科大学、南カルフォルニア建築大学の3大学による上野周辺地区でのワークショップを行った。異なる文化的背景から東京の都市組織を読み取ることで立体的に都市構造が解析できた。現在、出版を目指して編集作業を行っている。10月からは、「マクロな都市（再）開発とミクロなまちづくり」という全8回の連続公開講義を開催した。都市再生特別措置法など、国家が誘導する巨大な再開発によって、現在の東京の中心部の姿がつくられているメカニズムが開示され、同時にそれとは異なる小さなまちづくりの活動が生まれている、その多面的な都市生成の現場が報告された。
次年度の5月には、世界的に著名な建築家、思想家である磯崎新氏を招へいし、近未来の東京に関わるシンポジウムを開催する準備を進めている。



北山 恒

1950年生まれ。建築家、専門は都市理論。横浜国立大学大学院修了。代表作「洗足の連結住棟」「祐天寺の連結住棟」で日本建築学会賞、作品選奨受賞など。著書に『都市のエージェントはだれなのか』TOTO出版（2015）、『モダニズムの臨界』NTT出版（2017）、共著に『TOKYO METABOLIZING』TOTO出版（2010）などがある。

特別対談企画

「日本問答・江戸問答」

開催日：2018年4月21日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

本シンポジウムは、2017年11月に法政大学の田中優子総長と編集工学研究所所長の松岡正剛氏の対談『日本問答』（岩波書店）が刊行されたことを記念して行われ、EToS初代センター長の陣内秀信教授がコーディネーターを務めた。
講演は3部に分かれ、第1部では田中優子総長による講演「江戸の編集方法」、第2部では松岡正剛氏の講演「日本の編集力」、最後に陣内秀信教授を進行役として2人の対談「江戸力・日本力」が行われた。
まず、横山泰子センター長が開会の挨拶を行い、シンポジウムが始まった。講演および対談の概要は以下の通りであった。

第1部　「江戸の編集方法」田中優子
「内の中に外を取り込み、内を広げた江戸時代」という考えに基づき、「見立て」「やつし」「もどき」を手がかりとし、外国を含む外部の文物を積極的に取り入れながらも外来の要素に飲み込まれなかった江戸の文化の特質を俳諧、連句、芝居、浮世絵などを通して検討。さまざまな要素が排他的ではなく併存する「デュアルな江戸文化」のあり方を実証的に考察した。

第2部　「日本の編集力」松岡正剛
500年続く江戸東京という世界でも珍しい都市を手がかりに、江戸時代にはさまざまな優秀な文化人や学者がいたものの「グローバリズム」や「ユニバーサリズム」には馴染まなかった日本のあり方を「漢と和」や「神仏習合」といった「デュアル・スタンダード」の観点と古今東西の文献などを渉猟した成果に基づいて検討し、11の「日本人の発想構造」を提起した。

第3部　「江戸力・日本力」田中優子、松岡正剛（進行：陣内秀信）
「デュアル・スタンダード」の思考法を頼りに、江戸文化・日本文化を近代西洋的思考法とは異なる分析方法で理解しようと試みた。
実際には利用される頻度は多くない場合でも「利用されること」を前提に次の間を設けたり、建造物が名所の中心であり、名所と記念碑が連続性をもつ欧米と、建築物だけでなく景観や雰囲気さえも名所とする日本の独自性、あるいは江戸という都市がもっていた「ユニークさ」について、資料や実体験に基づいてさまざまな意見が交わされた。
このように、講演・対談とも本研究センターにふさわしい研究方法、思考法を提示するものであった。
（鈴村裕輔）

上：対談における田中優子総長（右）、松岡正剛氏（中央）、陣内秀信教授（左）。
下：会場の様子。

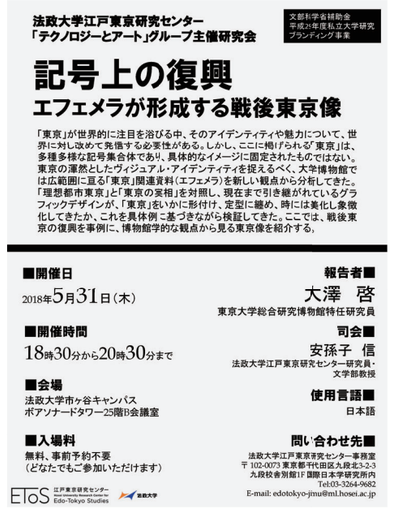
研究会

「記号上の復興ーエフェメラが形成する戦後東京像」

開催日：2018年5月31日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

「テクノロジーとアート」グループの研究会が開催された。今回は大澤啓氏（東京大学総合研究博物館）を招き、「記号上の復興ーエフェメラが形成する戦後東京像」と題して報告と質疑応答が行われた。司会はEToS研究員で法政大学文学部教授の安孫子信氏であった。
今回の報告では、大澤氏が計画時から携わったJPタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」が2016年から行っている連続展示「東京モザイク」での成果をふまえた資料の紹介と考察がなされた。報告の概要は以下の通りであった。

従来の東京そのものを研究する「東京研究」では、東京の都市計画についての検討は数多くなされてきた。しかし、図書館や博物館に収蔵されていない、あるいは資料収集の対象となっていないチラシやパンフレット、グラビア雑誌などの一時的印刷物（エフェメラ：ephemera）に関する研究はまだ十分になされていない。そのため、エフェメラを大量に収集して分析することは、それらがつくられた当時の東京像をより実像に近いかたちで明らかにすることに役立つ。例えば、太平洋戦争の終結後、アメリカ軍の進駐という状況を受けて、早い段階から日本国内ではアメリカ軍関係者や来日する外国人に向けた英文雑誌や観光案内の類が出版された。また、進駐軍の意向を反映するかたちでさまざまな進駐軍向けのエフェメラが作成された。
このようにエフェメラの内容を比較検討することで、そのつくり手の意向やつくり手の違いによる内容の変化が明らかになるだけでなく、つくり手が人々に与えようとした東京の印象の変遷も知ることができる。さらに、実際には廃墟と化した東京があるにもかかわらず、1930年代の東京の様子を再現したセットで映画を撮影したり、東京を1930年代の上海に例えることは、実際の復興の進捗の度合いではなく、記号の上で東京の復興が進んでいたことを示している。
以上のように、長期の保存を前提としないエフェメラを網羅的に収集し、得られた資料を比較検討することでこれまで見過ごされてきた戦後の東京の姿を考察した大澤氏の報告は、江戸東京を「テクノロジーとアート」の側面から研究するための重要な手がかりを与える、意義深いものであった。
（鈴村裕輔）


法政大学江戸東京研究センター
「テクノロジーとアート」グループ主催研究会

文部科学省補助金
平成29年度私立大学研究ブランディング事業

記号上の復興
エフェメラが形成する戦後東京像

「東京」が世界的に注目を浴びる中、そのアイデンティティや魅力について、世界に対し改めて発信する必要性がある。しかし、ここに掲げられる「東京」は、多種多様な記号集合体であり、具体的なイメージに固定されたものではない。東京の漠然としたヴィジュアル・アイデンティティを捉えるべく、大学博物館では広範囲に亘る「東京」関連資料（エフェメラ）を新しい観点から分析してきた。「理想都市東京」と「東京の裏相」を対照し、現在まで引き継がれているグラフィックデザインが、「東京」をいかに形付け、定型に纏め、時には美化し象徴化してきたか、これを具体例に基づきながら検証してきた。ここでは、戦後東京の復興を事例に、博物館学的な観点から見る東京像を紹介する。

■開催日
2018年5月31日（木）

■開催時間
18時30分から20時30分まで

■会場
法政大学市ヶ谷キャンパス
ボアソナードタワー25階B会議室

■入場料
無料、事前予約不要
（どなたでもご参加いただけます）

報告者
大澤　啓
東京大学総合研究博物館特任研究員

司会
安孫子　信
法政大学江戸東京研究センター研究員・文学部教授

使用言語
日本語

問い合わせ先
法政大学江戸東京研究センター事務室
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
九段校舎別館1F 国際日本学研究所内
Tel:03-3264-9682
E-mail: edotokyo-jmu@ml.hosei.ac.jp

EToS 江戸東京研究センター Research Center for Edo-Tokyo Studies　法政大学

上：講演する大澤啓氏（中央）。
下：「記号上の復興ーエフェメラが形成する戦後東京像」チラシ。

研究会

「江戸東京の名所研究ー課題を共有し、可能性を考えるー」

開催日：2018年6月23日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

「江戸東京のユニークさ」研究プロジェクトの平成30年度第1回目の研究会を実施した。ゲストに江戸名所研究をリードしてきた目白大学教授の鈴木章生氏を迎え、江戸東京センター兼担研究員の小林ふみ子とともに報告した。趣旨説明は、以下の通りであった。

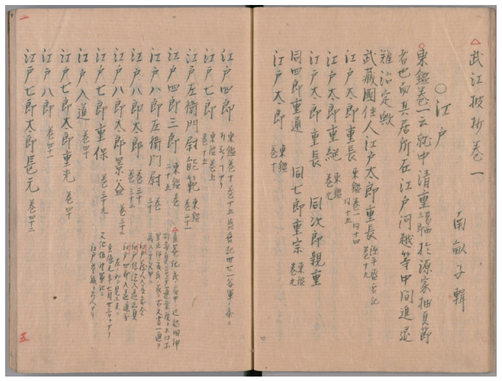
江戸東京の「名所」はその自然と文化両面に関わってユニークさをあらわす指標であり、時代ごとに都市部から武蔵野の郊外までの各所に独自の魅力が見出されてきた。それらがいかに形成・認識され、そこではいかなる文化活動が行われたのか。従来の研究成果をおさえ、今後の江戸の名所研究に必要な論点を考えようとする試みであった。

鈴木氏による第1報告「江戸東京名所研究の現状と課題」は、これまでの主要な研究をおさえて研究対象や関心・方法の広がりを総合的に紹介し、今後の展望までを提示するものであった。古代より歌枕として発達した名所が、近世に入って実際に人びとで賑わう地となってゆくこと、近現代には社会の変化や種々の出来事を記憶するものになること、今日さらにサブカルチャーの聖地巡礼やパワースポットなどとして新たな価値を見出される地が出てきていること。そして、かつては時代を追って蓄積されていくものであった「名所」が、今日、変化し消費されるものとなっていることが指摘された。さらに今後の新たな名所形成要因として記念碑を取り上げた。それらは事件や出来事、社会的・文化的事象の記憶を永続的に記憶するものとして古くより建造されたが、とりわけ1990〜2000年代に多くつくられたという。それを資料として再評価することで、時代の流行風俗を把握し、新たな都市の特性を見出し得るという指摘であった。

第2報告は、小林による「江戸の由緒を探究する意識ー大田南畝（なんぽ）を端緒として一」であった。江戸名所を主題とする作品をおそらくもっとも多く残した人物として大田南畝に注目し、その著作のうち世に流布した書物に漏れた江戸各地についての諸情報を記録した地誌『武江披砂（ぶこうひしゃ）』を俎上に上げた。その特徴のひとつは、後年の斎藤月岑（げっしん）の『江戸名所図会』に見られる広域化、つまり後年の「朱引き」をはるかに超えた地点が含まれることである。背景に18世紀後半以降の文人趣味の盛行にともなう「郊行」行為を指摘した。二つ目の特徴として、文献だけでなく実地踏査による金石文や古老の聞き書きなど多様な情報を収めることを挙げた。とりわけ旗本の故実家の瀬名貞雄の影響を論じ、考証の方法や関心の所在が山東京伝らの考証随筆の濫觴となっている可能性も指摘した。

歴史学および文学研究両分野の専門家から一般の方々まで、50名余の参加を得てその後の質疑も活発に行われた。

（小林ふみ子）



上：大田南畝編『武江披砂』巻1（国立国会図書館蔵本）。
下：報告を行う鈴木章生氏。

国際シンポジウム

「風土（FUDO）から江戸東京へ」

開催日：2018年7月7日、8日
場所：法政大学九段校舎、市ヶ谷キャンパス

本シンポジウムは、「テクノロジーとアート」グループと「江戸東京のユニークさ」グループの共催であり、第1日目は法政大学九段校舎、第2日目は市ヶ谷キャンパスで行われた。今回は和辻哲郎が構想し、オギュスタン・ベルクが発展させた「風土学」の視点に基づき、12名の報告者が江戸東京の特質を哲学、都市論、文化学、文学、思想史、美学、建築学などの側面から検討した。司会は両日とも安孫子信、横山泰子、山本真鳥の3氏が務め、陣内秀信氏が各日の報告の総括を行った。各報告の報告者と論題は、以下の通りであった。

第1日目（7月7日）

1 「『風土』から見た都市『東京』の珍しさ」星野 勉（法政大学）

2 「荒野と名前のない海と：江戸東京の原意味」河野哲也（立教大学）

3 「街の蛍：和辻哲郎とオギュスタン・ベルクとともに都市の風土を考える」ジャン＝フィリップ・ピエロン（リヨン第3大学）

4 「不可能のパリとしての東京ー『都市の風景』批判」
チエリー・オケ（パリ・ナンテール大学）

5 「文化的景観と風土、その担い手」福井恒明（法政大学）

6 「和辻哲郎の『江戸城』発見ー『城』（1935）における壕と並木ー」
橋本順光（大阪大学）

第2日目（7月8日）

1 「和辻風土学で解く江戸東京の特質ー皇居・武家屋敷・宗教空間ー」
田中久文（日本女子大学）

2 「和辻哲郎にとっての東京ー田舎あるいは古代という対立軸から」
衣笠正晃（法政大学）

3 「気候と雰囲気：都市のための二つの概念」
エリー・デューリング（パリ・ナンテール大学）

4 「〈脱中心化〉と〈再中心化〉ー風土学の本質的契機」
木岡伸夫（関西大学）

5 「東京に住まう人々を撮影するー風土学の映画への適用の試み」
クレリア・ゼルニック（パリ国立高等美術学校）

6 「イノヴェーションに直面する風土ー現代日本での都市をめぐる言説に見る風土の消失についての考察」
アンドレア・フロレス・ウルシマ（京都大学）

以上12件の報告を通して、江戸東京を通底し、しかも人々のあり方を規定してきた風土が日本だけの現象なのか、それともより普遍性をもつ現象なのか、あるいは風土を形成する要素は何であるのかといった点が議論された。その意味で、本シンポジウムは江戸東京研究センター（EToS）の理論的な枠組みの形成に向けて重要な契機となった。

（鈴村裕輔）

上：シンポジウム第1日目の様子。
下：シンポジウム第2日目の様子。

研究会

「アートとテクノロジーでみる江戸東京」

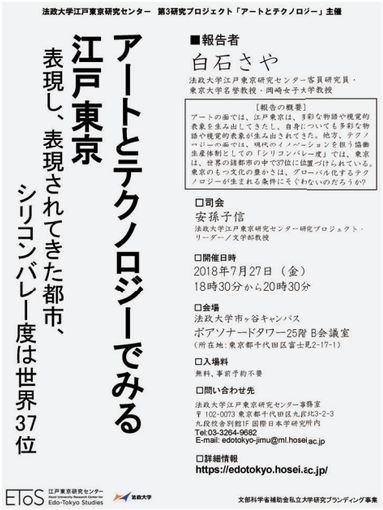
開催日：2018年7月27日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

「テクノロジーとアート」グループの第2回研究会が開催された。今回は白石さや氏（岡崎女子大学、東京大学）を招き、「アートとテクノロジーでみる江戸東京ー表現し、表現されてきた都市、シリコンバレー度は世界37位」と題して報告と質疑応答が行われた。司会はEToS研究員で法政大学文学部教授の安孫子信氏であった。報告の概要は、以下の通りであった。

マイケル・モー著の『The Global Silicon Valley Handbook』（Grand Central Publishing、2017）によれば、過去3年間のスタートアップ企業への支援など複数の指標を総合的に判断した結果、東京の「シリコンバレー度」は世界で38位であるとされている。その一方で、日本においても、1945年の終戦直後から、10代後半から20代前半の漫画家たちがコミックを描き始めたように、「受け取る人が『新しいものだ』と意識すること」を“innovation”と捉えるなら、『冒険ダン吉』（講談社、1933〜1939）の作者である島田啓三が手塚治虫に「君のマンガはマンガではない」と指摘したとされる逸話は、漫画家として一家を築いていた島田にとっては手塚の作品が自分の知るマンガとは異なる新しいものであったことを示唆しており、マンガの分野における手塚のイノベーションを表している。また、マンガやアニメとテクノロジーとの関係は、以下の5つの特徴にまとめられる。

1 科学技術への夢
2 科学技術の可能性とパワー
3 通信技術の進化とともに発展
4 米国ではSFファンが享受の第一世代
5 米国では1980年代以降コンピュータの普及と軌を一にしてマンガが普及する

グローバル化は多様化をもたらすものであり、グローバルなマーケットは多文化を前提とする。そして、世界は相互に接触し多様性を増すなら、誰かがつくったプラットフォームではなく、多様で異なるものを抱え超える新たなプラットフォームをつくることが重要であり、その際に、国家の枠組みを越えた江戸東京を研究する意義がある。
また、白石氏はシリコンバレーを「イノベーションをもたらす精神」が集まる場と捉え、そこに集う人々のあり方を「親になったコンピュータ・キッズの子育て観」という視点から検討することで、新たにプラットフォームをつくり出すことの重要性と江戸東京研究がもつ可能性を指摘した。それは今後の本研究にひとつの指針を与え、未来を展望する意義深い会となった。
（鈴村裕輔）



上：講演中の白石さや氏。
下：「アートとテクノロジーでみる江戸東京」チラシ。

研究会

「江戸周辺地域の広域支配」「江戸の都市統治と身分制」

開催日：2018年9月29日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

「江戸東京のユニークさ」プロジェクトの平成30年度第２回目の研究会を実施した。近世日本における江戸のユニークさとしては人口が多く、多様な人が暮らしていたという生活空間上の特色が挙げられる。100万の人口を擁し、多様な身分・階層の人々が生活する都市には、どんな運営上の仕組みがあったのか。江戸および江戸周辺の統治のあり方について、日本近世史の研究者が報告を行った。
まず、人間環境学部の根崎光男教授（日本近世史、環境史）から、「江戸・周辺地域の広域支配ー鷹場・留場・江戸十里四方を中心にー」と題した報告がなされた。従来の研究史を整理しながら、これまでの江戸周辺地域の広域支配論で展開された鷹場一元支配論を乗り越えるべく、江戸およびその周辺地域を一体的に捉えた広域支配が多元的・重層的であったことを、「江戸五里四方」「江戸十里四方」という地域枠組みで展開した鷹場支配、江戸城御用物の徴収、留場支配、鉄砲の取り締まり、鉄砲火薬製造の規制を事例に基づき検討したものである。
続いて、文学部の松本剣志郎専任講師（日本近世史）による報告「江戸の都市統治と身分制」が行われた。江戸が身分別居住制に応じた身分制支配によって分割支配されていたのみならず、公共空間支配によっても分割されていたことに注目し、道奉行を視座に、都市住民としての諸身分、およびその支配役職との関係を問う内容であった。武家、寺院、町方の場合で事情は異なり、特に町方では、市場が往還のうえに成り立つものであったから、その支配をめぐって町奉行と道奉行との競合が鋭く立ち現れたことが指摘された。江戸は身分制を体現しながらも、都市であるがゆえに公共空間支配を必要としたことが結論として示された。
日本近世史の手堅い報告で、巨大都市江戸が多元的、重層的に支配されていたことが確認された。報告それ自体は近世の事例の分析であったが、現代の都市空間の管理のあり方との共通点や相違点が指摘され、有意義な質疑応答がなされた。今回の研究会をふまえ、次年度以降は異分野の研究者との課題を共有し、考察する機会をもちたい。
（横山泰子）

上：パワーポイントを使って講演中の人間環境学部の根崎光男教授と参加者の皆さん。
下：松本剣志郎文学部専任講師。

研究会

「立原道造ー故郷を建てる詩人」

開催日：2018年10月26日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

「テクノロジーとアート」グループの第3回研究会が開催された。今回は岡村民夫氏（法政大学）を招き、「立原道造ー故郷を建てる詩人」と題して報告と質疑応答が行われた。司会は、EToS研究員の安孫子信氏であった。岡村氏による報告の概要は、以下の通りであった。

立原道造は夭折の詩人であり、東京帝国大学で建築学を学び、卒業後は建築事務所で活動したモダン建築家としても知られる。24歳で結核により没したため、残した建築作品は少ない。シェリングやハイデガーなどの実存哲学に影響を受け、「住」ないし「人生」を核とした建築哲学をもっていた。「美」よりも「住」を優先する現実派であり、評価したのは「住みよい」建築物ではなく、「住み心地よい」建築物であった。立原にとっての「住」の場所はモダン建築ではなく、生家の日本橋蛎殻（かきがら）町の家、ヴァナキュラーな町屋であり、自らの経験から「住み心地よい」建築物という考えを導き出した。さらに、その足跡を考える際に重要なのが「故郷」の問題である。立原にとって「故郷」は常にあるものではなく、「行ったり来たりするもの」であり、自身の不在中に訪れるものでもあった。また、屋根裏部屋や病気といった記憶と結び付くものが、「故郷」であった。そして、師事した堀辰雄の勧めで知った浅間山麓を「故郷」と見なした。小林秀雄、堀辰雄、室生犀星ら先達も「故郷喪失」の感覚を抱いていた。その意味で、立原の「故郷」の感覚は、同時代の作家たちとの対比からも検討することが可能となるだろう。

最後に、立原を含む江戸東京人にとっての「故郷」とは何であろうか。江戸東京人は、1923年9月1日の関東大震災によって生まれ育った家や場を失ってしまった。そのような江戸東京人にとって、「故郷」とは失われた場を補うための人工的な存在であり、「仮の故郷」、記憶やノスタルジーのなかの存在でもあったのである。

本研究会を通して、詩人として知られる立原道造のもうひとつの側面である建築家としての業績に焦点をあてることで、建築や芸術と生の関係、さらに江戸東京人にとっての「故郷」のあり方についての問いが発せられたことは、今後の江戸東京研究に大きな意義をもたらすものとなった。

（鈴村裕輔）

法政大学江戸東京研究センター　第3研究プロジェクト「テクノロジーとアート」主催

立原道造

故郷を建てる詩人

報告者
岡村民夫
法政大学江戸東京研究センター研究員・
国際文化学部教授

2018年
10月26日（金）
18時30分から20時30分

■報告の概要■
24歳で夭折した詩人・建築家・立原道造。ドイツ「ガ展」道造――故郷を建てる詩人」に基づき、彼の詩と建築が、下町の東京人による「故郷」の探求として再評価する。師の堀辰雄の場合と同様、関東大震災とその後の東京下町の復興は、大きな故郷喪失感を彼にもたらした。1930年代における彼の文学と建築設計は、非常に西洋的でモダンに見えるが、その底には、下町の木造町屋や看板建築に対する郷愁、江戸東京人的な山岳信仰が見つかる。彼はそうした懐かしくバナキュラーなものへの志向を抱えながら、退嬰的な憧れへ赴くことなく、高原や郊外に新鮮な「故郷」を創造する方向へ歩んだのだ。

□司会
安孫子信
法政大学江戸東京研究センター研究プロジェクト・リーダー／
文学部教授

□会場
法政大学市ヶ谷キャンパス
ボアソナードタワー25階 B会議室
（所在地：東京都千代田区富士見2-17-1）

□入場料
無料、事前予約不要

□問い合わせ先
法政大学江戸東京研究センター事務室
〒 102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
九段校舎別館1F 国際日本学研究所内
Tel:03-3264-9682
E-mail: edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp

□詳細情報
https://edotokyo.hosei.ac.jp/

EToS 江戸東京研究センター Center for Edo-Tokyo Studies　法政大学

文部科学省補助金私立大学研究ブランディング事業

上：講演する岡村民夫氏。
下：「立原道造ー故郷を建てる詩人」チラシ。

研究会

「近代東京名所研究の課題～史資料に表現された江戸東京」

開催日：2018年11月15日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

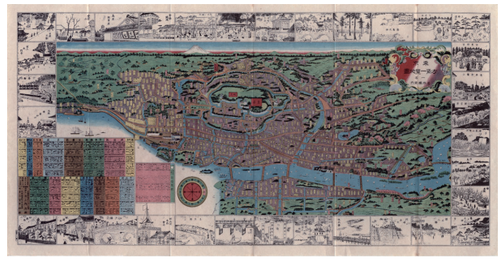
本研究会では、近代東京の変容と名所記述の特徴を、明治・大正・昭和に作製・出版されたさまざまな地図・名所図会・観光ガイドブックなどの史資料、そして近代東京を代表する随筆家・洋画家である木村荘八によって表現された東京をもとに検討し、近代東京名所研究の新たな課題を考えた。

第1報告は、江戸東京研究センター研究員の米家志乃布による「近代東京の名所～地図・名所図会・観光ガイドブックから」と題し、各史資料に沿った先行研究をふまえ今後の研究課題を提示した。まずは、近代東京の名所が先行研究でどのように議論されてきたのかを整理した。その際、研究に利用されている史資料として、東京案内本（『東京名所図絵』小川尚栄堂、『帝都案内』中興館、『大東京案内』中央公論社など）、ガイドブック（『ブルーガイド』実業之日本社、『JTBポケットガイド』日本交通公社出版事業局、『るるぶ』JTBパブリッシングなど）、名所絵や名所写真（石版画・銅板画、絵葉書、写真帖など）などがあることが紹介された。続いて、近代東京の名所研究の史資料として、「都市図」「東京名所図会」「東京案内」の3点を挙げ、各史資料を用いた研究のあり方が提示された。

第2報告は、江戸東京センター長の横山泰子氏による「木村荘八が描いた東京名所～居住者と散歩者の視点」であった。荘八は明治の実業家木村荘平を父にもち、生家の「いろは牛肉店」は浮世絵や東京案内記、東京の地図に掲載されていた。かくの如き家庭環境ゆえ、荘八は東京の名所の住人であり、居住者としての視点で名所を捉えていた。若い頃から東京に対して愛着をもっていた荘八だったが、外国旅行と関東大震災を経てからは、積極的に東京を歩き絵と文で東京を記録した。また、東京を「こり固まりでなく、自由に動く、人と時代につれて動くその変通性」の都市として捉えている（「私の見たる東京」『中央文学』春陽堂掲載）。そして、東京が変化の激しい都市であることを意識し、変化があるがゆえに記録し、表現する必要があると考えていた。近代東京の名所の特徴として、変通性の都市であるがゆえに、東京では名所自体が変化しやすく追憶の対象になりやすいことが考えられる。また、名所の表現・記録方法の変化によって、名所のあり方も変わった可能性がある。さらに、広大な東京では住民であってもすべてのエリアに精通することはできないため、誰にとっても東京は観光地になり得る。また、東京の名所観光も多様なかたちになり得る。

最後に、コメンテーターの陣内秀信氏により、名所のあり方が、近世を受け継ぐ伝統社会から近代に移行する際に、経済、産業、交通、都市構造のあり方と連動して大きな変化が見られたことに触れつつ、名所研究が、江戸東京のあり方の本質を突くうえできわめて普遍性をもった重要なテーマであるとの認識が示された。

（米家志乃布）



上：コメントを行う横山センター長（左）と陣内氏（右）。
下：「名所絵入 東京方角一覧図」復刻版（銅板色刷、古地図史料出版、1880年10月）

シンポジウム

「アートと東京」「文学と東京」

開催日：2018年11月24日、25日
場所：法政大学市ヶ谷田町校舎

「テクノロジーとアート」グループのシンポジウム「アートと東京」および「文学と東京」が開催された。24日には「アートと東京」で6名、25日には「文学と東京」で4名が報告を行い、「アート」と「文学」を手がかりとして、今日、東京という都市がいかなる文化的意味をもち得るかが検討された。各報告と論題は、以下の通りである。

シンポジウム「アートと東京」

第1セッション

1 「アートを受容する場の多層性」荒川裕子（法政大学）
2 「Tokyo Underground」クレリア・ゼルニック（パリ国立美術学校）

第2セッション

1 「『MOTサテライト』ー現代美術とまちとの交わりー」
小高日香里、北澤ひろみ（東京都現代美術館）
2 「東京における森美術館のあり方について」
椿 玲子（森美術館）

第3セッション

1 「アートの視点で見る都市の公共空間づくり」
岩井桃子（横浜国立大学）
2 「ネクロポリスとしての東京」古屋俊彦（明治大学）

シンポジウム「文学と東京」

第1セッション

1 「立身出世の都ー江戸・東京」中丸宣明（法政大学）
2 「リアリズムの変容ー夏目漱石『三四郎』から吉田修一『横道世之介』まで」
田中和生（法政大学）

第2セッション

1 「『ドヤ街』から読む東京ー高森朝雄原作、ちばてつや作画『あしたのジョー』と三島由紀夫『音楽』」山田夏樹（昭和女子大学）
2 「不定形に広がる東京をどう描くかー東京郊外の物語」
中沢けい（法政大学）

2日間の報告と質疑応答を通して、アートや文学の対象となるだけでなく、人々に鑑賞の機会を与え、また新たな創造の契機となる東京の特徴や問題点、さらに今後の可能性が示された。
（鈴村裕輔）

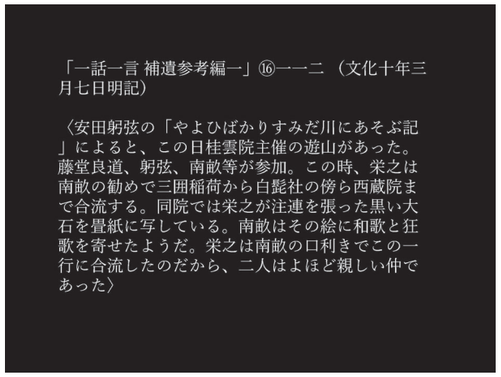
上：シンポジウム「アートと東京」におけるパネルディスカッションの様子。
中：シンポジウム「文学と東京」におけるパネルディスカッションの様子。
下：「アートと東京」「文学と東京」チラシ。

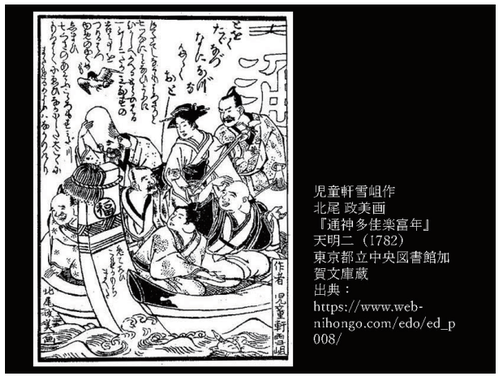
研究会

「隅田川をさかのぼる福神の系譜ー大田南畝文・鳥文斎栄之画『かくれ里の記』までー」

開催日：2018年11月30日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

異色の旗本出身の浮世絵師、鳥文斎栄之（ちょうぶんさいえいし）による隅田川を描いた三福神吉原通図巻をめぐる諸問題が論じられた。栄之と江戸文人の大田南畝ら、同じ発想・考えを共有するコミュニティのなかで新たな隅田川七福神という名所が形成され、またそれら文人たちとの関係のなかで新しい名所ー百花園をつくり上げた佐原掬塢（さわらきくう）も加わって、空間に対する新しい見方が提示されたことが論じられた。ここに、人々が集いあって名所を訪ね、その記憶から作品を創作するという習慣ができたのである。そうした行為が昭和にいたるまで続いていることも紹介された。ひとつの結論は、美術史が文化遺産研究のなかにある視座から、すなわち風景を社会的構築物と捉え、絵画や画賛のようなモノが地域の環境に関与するコミュニティをつくることに果たす役割に焦点を当てることによって、恩恵を受けることがあるということであった。
（ラドゥ・レカ、小林ふみ子）





上：研究会の資料。
中：七福神の戯作の先例のひとつ。
下：鳥文斎栄之と大田南畝の親しい交流を示す資料。

シンポジウム

「水の都市と持続可能な発展 ヴェネツィアと東京」

開催日：2018年6月28日
場所：イタリア文化会館

本シンポジウムは、法政大学江戸東京研究センター（EToS）とイタリア文化会館の日伊共催により開催された。3年前にヴェネツィア・カ・フォスカリ大学において、ヴェネツィアと東京の水都比較の国際シンポジウムが行われ、陣内秀信氏、土屋信行氏（リバーフロント研究所技術参与）が参加。主催者側の中心人物であったステファノ・ソリアーニ氏（ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学教授）が東京への関心を深め、2018年に調査のために来日するのを機に日本での開催の運びとなった。
本シンポジウムは2部に分かれ、第1部では、ステファノ・ソリアーニ氏の講演「水の都市と持続可能な発展ー挑戦と可能性 ヴェネツィアのケース」、第2部では陣内秀信氏、土屋信行氏、高村雅彦氏を交え4者のパネルディスカッションが行われた。近年のヴェネツィアが抱えている問題をよく知り、行政とも深く関わるソリアーニ氏とのディスカッションにより、ひじょうに充実したシンポジウムとなった。
（金谷匡高）

上：第1部で講演するステファノ・ソリアーニ氏（ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学教授）。
下：第2部での4者によるパネルディスカッションの様子。

シンポジウム

「江戸文化×デザインエンジニアリングの可能性」

開催日：2018年11月9日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

本シンポジウムは、江戸から東京への改称、東京府開設から150年の節目となる平成30年を記念して、法政大学江戸東京研究センター（EToS）と公立大学産業技術大学院大学（AIIT）の共催として開催された。シンポジウムの内容は以下の通りである。

1 開会挨拶　公立大学産業技術大学院大学学長　川田誠一
2 「連の江戸文化」法政大学総長 田中優子
3 「『関係性』で磨く新幹線のデザイン」
　公立大学産業技術大学院大学名誉教授 福田哲夫
4 「江戸から学ぶ 関係性・身体性とデザイン」
　公立大学産業技術大学院大学助教 金箱淳一
5 閉会挨拶　法政大学江戸東京研究センター長 横山泰子

本シンポジウムは、公立大学産業技術大学院大学からの要請を受け、同大学と本学とでゼロから企画立案し、実行したものである。田中総長による「連」と「循環」についての講演、開発プロセスの背景に「連」につながるコミュニケーションがあるという福田名誉教授、江戸文化の身体性に言及しつつ、聴衆を巻き込んでの金箱助教の発表とバラエティ豊かな内容となった。
（横山泰子）

講演中の田中優子総長。

シンポジウム

朝日教育会議「江戸から未来へ アバター for ダイバーシティ」

開催日：2018年12月9日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

朝日新聞社との共催によるもので、シンポジウムは横山泰子センター長の挨拶から始まった。
第1部は、田中優子総長の基調講演である。山東京伝の作品や落語の『粗忽長屋（そこつながや）』を例に「連」と「アバター」の発展について述べ、江戸時代の社会における「多様性」について考察検討を行った。
第2部は、現代の「アバター」を研究する池上英子氏（米国ニュースクール大学 教授）による講演であった。池上氏は、セカンドライフというインターネット空間につくるもう一人の自分「アバター」を通して、人々の脳内について研究を行う。その近年の研究の一端を「ニューロ・ダイバーシティ」や「分身主義」という言葉を用いて多様性を認めることについて発表いただいた。
第3部は司会に一色清氏、パネリストに柳家花緑氏を交えて4者によるパネルディスカッションを行った。ここでは、「アバター」を通して「多様性」を認める社会へのまなざしを議論し、近世と現代におけるそのまなざしの違いを明らかにした。
最後に、参加者からの質問に各登壇者が回答しシンポジウムは終了した。
（金谷匡高）

第3部でのパネルディスカッションの様子。
左から、柳家花緑氏、池上英子氏、田中優子総長。

第9回外濠市民塾

「いま、外濠をどうするのか？～浚渫からかいぼりへ～」

開催日：2018年7月15日
場所：DNPプラザ

福井恒明教授による開会挨拶の後、外濠市民塾と三輪田学園が共同で実施した外濠水上調査会（2018年4月14日実施）について三輪田学園の「外濠フレンズ」のみなさんからご報告いただいた。さらに、認定NPO法人生態工房の理事、片岡友美氏に「井の頭公園かいぼりによる水辺再生活動」と題してご講演いただいた。その後、「外濠2020-2036ワークショップ」として、外濠開削400年となる2036年に向けた外濠の環境や外濠での活動についてワークショップ形式でアイデアを出し合った。近隣の皆様をはじめ、三輪田学園、中央大学、日本大学、東京理科大学、法政大学の学生など、合計56名の方にご参加いただき、外濠をテーマに多くの意見が交わされた。
成果の概要については、8月27日から11月5日まで新宿区立四谷図書館で開催されている展示「『内藤新宿を愉しむ』と外濠」にパネルとして展示された。
（福井恒明）

上：認定NPO法人生態工房理事 片岡友美氏による講演「井の頭公園かいぼりによる水辺再生活動」の様子。
下：「外濠2020-2036ワークショップ」の様子。

シンポジウム
「水系と音風景が繋ぐ 善福寺池と小菅村 ～土地の記憶の発掘・継承・発信～」
開催日：2018年11月4日
場所：井荻會館

「トロールの森2018」への参加プロジェクトとして、青山学院大学総合文化政策学部の鳥越けい子研究室が企画・主催したシンポジウム「水系と音風景が繋ぐ 善福寺池と小菅村～土地の記憶の発掘・継承・発信～」に法政大学エコ地域デザイン研究センターおよび江戸東京研究センター（EToS）のメンバーが協力した。当日のプログラムは以下のとおりである。

第１部　報告1「〈池の畔の遊歩音楽会〉による旧井荻環境文化資源の発掘」鳥越けい子
第２部　報告2「玉川源流の玉姫伝説と神楽づくり」神谷 博
第３部　パネルディスカッション「水系と音風景が繋ぐ善福寺池と小菅村」高村雅彦、横山泰子、神谷 博、鳥越けい子

東京・杉並区井荻の善福寺池、玉川源流の小菅村で実際に地域活動を行っている鳥越と神谷による具体的な現地報告に加え、横山と高村を交えたパネルディスカッション、50名の参加者による対話がなされた。「トロールの森」は、杉並区の都立善福寺公園から西荻窪周辺にかけてアートでつなぐイベント。開催場所の井荻會館も味わい深く、青山学院大学の鳥越ゼミのメンバーや地域の方々との交流を深めることができた充実した会となった。
（横山泰子）

「水系と音風景が繋ぐ善福寺池と小菅村～土地の記憶の発掘・継承・発信～」チラシ。

多摩から江戸・東京をつなぐ水循環の保全と再生 第３回シンポジウム
「市民が選ぶ玉川上水と分水網の関連遺構100選
～玉川上水・分水網にまつわるお宝をみんなで次の世代に伝えていきませんか～」
開催日：2018年12月1日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

本シンポジウムは、玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会主催、法政大学江戸東京研究センターほかの後援で開催された。
主催者挨拶、福井恒明教授（江戸東京研究センター）によるシンポジウム趣旨説明の後、関連遺構100選の選考委員長であり、神戸芸術工科大学教授の西村幸夫氏より「玉川上水・分水網関連遺構100選の選考について」と題して玉川上水から隅田川に至る地域の市民団体から推薦された遺構群の中からの選考経過が報告された。また、中央大学教授の山田正氏より「玉川上水への試験通水について」と題し、玉川上水の現状や試験通水に向けての展望が報告された。その後、パネルディスカッション「玉川上水・分水網関連遺構100選と試験通水を巡って」が中央大学教授の谷下雅義氏の司会で行われ、西村幸夫氏、法政大学特任教授の陣内秀信氏、日本水フォーラム代表理事の竹村公太郎氏、東京都江戸東京博物館学芸員の真下祥幸氏、日本橋再生推進協議会水辺再生研究会会長の山本泰人氏から、江戸東京の水循環網としての玉川上水の重要性やその再生に向けての期待が表明された。今回のシンポジウムは初めて玉川上水の上流から下流までの市民団体が一堂に会するものとなった。
（福井恒明）

上：西村幸夫・神戸芸術工科大学教授による「玉川上水・分水網関連遺構100選の選考について」の報告。
下：パネルディスカッション「玉川上水・分水網関連遺構100選と試験通水を巡って」。

FCLT江戸東京国際ワークショップ
「都市の文脈に挑戦する」
開催日：2018年7月21日
場所：HYPERMIX

「FCLT（Future City Laboratory Tokyo）」は、江戸東京研究センター（EToS）の「都市東京の近未来」の研究グループである。法政大学建築学科の協力のもと、トリノ工科大学と南カリフォルニア建築大学と「都市組織にチャレンジすること」を共通テーマにワークショップを実施した。参考図は、江戸東京の中心部を4つの方法で記述したものである。街路と地所ー建物が地形の中で織り成すパターンは、それぞれの都市の自然環境、文化、経済、土地所有などの制度、建築材料および建築構法などを反映して驚くほど多様である。3大学の教員と学生がトリノ（欧州）、ロサンゼルス（米国）、東京（アジア）という3都市の都市組織を念頭に置きつつ、上野ー谷中ー根津という、現在の東京の中でも「江戸東京」の連続性が垣間見える地域を調査研究の対象としたときにどのような知見が得られるのだろうか？
ワークショップは、7月16日に参加者全員による現地見学を行い、21日に最終発表会を実施。短期集中作業だったが、日本側で周到な準備を行ったこと、期間中に3大学の教員によって何度か予備発表会が行われたことが最終発表の質に貢献した。また、上野公園を取り巻く6つの対象地域の多様性と固有性が関係者の大きな関心を集め、江戸東京の都市の知られざる魅力を引き出した有意義な内容となった。
（渡辺真理）

上：2018年7月21日に行われたラウンドテーブルの様子。法政大学、SCI-Arc、PoLiToの3大学が参加した。
下：ワークショップ初日、上野周辺の対象エリアにて法政大学の学生のガイドでフィールドワークを開催。

建築フォーラム
「都市東京の近未来：２つのインテルヴェント＞ マクロな都市（再）開発とミクロなまちづくり」
開催日：2018年10月2日～12月11日（全8回開催）
場所：法政大学市ケ谷田町校舎 マルチメディアホール

東京という都市は絶えず生成変化を続けている。現在、東京では2020年およびそれ以降を目指して都市を再編する行為が数多く進行している。その東京の近未来を、マクロな都市再開発とミクロなまちづくりの双方から立体的に概観しようという試みである。そこで、東京の巨大再開発に携わる中枢のメンバーと同時に、小さなまちづくりを進める当事者を迎えて全8回の公開連続講義を行った。東京の中心部は厳格なマーケットメカニズムに対応する巨大開発によって都市の外形が決められている。戦後の高度経済成長後、1969年に都市計画法が制定され、翌年の市街地再開発法により再開発の方向が付けられた。21世に入り都市再生特別措置法などの国家に誘導された巨大な再開発によって、急激に現在の東京の中心部の姿が形成されている。この大きな現代都市形成のなかで近年、インフォーマルコモンズと呼ぶ、コミュニティ再生を主題とする小さなまちづくりの活動が生まれている。成熟した民主主義社会である日本では、経済活動として厳密につくられるインフラのような都市構造を受け入れながら、そこに生活という現実を受け入れるマクロとミクロが混在する新しい都市の姿が浮上している。
（北山 恒）

「都市東京の近未来：２つのインテルヴェント＞マクロな都市（再）開発とミクロなまちづくり」ポスター。

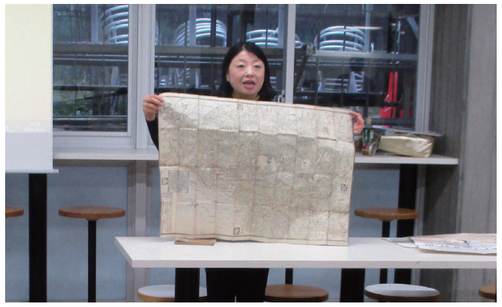
キックオフ・ミーティング

「法政大学生・付属校生の江戸東京チャレンジー法政のみんなで江戸東京の研究をはじめよう！ー」

「江戸東京チャレンジ」は、法政大学の学生（付属高校生を含む）による江戸東京に関する自主的な研究である。2018年8月末より広く研究チームを募集し、高校生から大学生、大学院生までを含めた計12のチームが結成され、10月13日に市ヶ谷キャンパス田町校舎にて、第1回のキックオフミーティングが開催された。

ミーティングの主な内容は、江戸東京の基礎的地理に関する学習、江戸東京にまつわるクイズ、テーマの設定や研究方法に関するイントロダクション、そして、学生の各自主チームによる研究テーマ案と研究方法等の構想および抱負の披露。法政大学キャンパス（付属中高を含む）の立地点をみると、外濠、玉川上水をはじめとした江戸東京そのものであり、参加学生メンバーのみなが、本研究ブランディング事業に関わることの意義、江戸東京研究のおもしろさをあらためて確認し合った。各チームとも、10月より研究活動を本格的にスタートし、その結果を2019年３月９日に市ヶ谷キャンパス、ゲート棟G503教室にて発表する予定である。

（石神 隆）



上:法政大学学生向けの「江戸東京チャレンジ」チーム募集ポスター。
下:キックオフミーティングでの、小林ふみ子教授による江戸古地図の紹介など。

講義

「東京MAP」の作成

江戸東京研究センター（EToS）のブランディング事業は、個々人の研究の推進や外部との連携だけでなく、学生を中心とする学内への周知とその魅力的な世界への誘導、いわゆるインナーブランディングが欠かせない。このことは、将来の江戸東京に関わる研究者や社会人の育成という意味でも重要なミッションである。そこで、デザイン工学部では、学部2年生が主体となり、修士課程の大学院生がアドバイザーとなりながら、自分たちの視点で、「新しい東京の地図」をつくるという演習の講義を行っている。

東京を歩けば、個々の場所の独自性が実に多様であることがわかる。しかしながら、自分自身が物を見て判断するための「モノサシ」を各自がもっていなければ、何を見て、どのように評価するのかがわからない。この講義では、東京をテーマに、自分自身が興味をもったまちや建築、地域、空間を選び出し、その特徴を読み解いて、それをマップ化することにより、その「モノサシ」を各自が身に付けることを目的としている。同時に、東京のさまざまな地域の多様な資産を掘り起こし、そこに光を当てて価値付けて提示する作業でもある。作品の詳細はホームページをご覧いただきたい。

（高村雅彦）

プロジェクト

「東京発掘プロジェクト　水辺編」

デザイン工学研究科建築学専攻の院生を中心に、東京の水辺を対象に、その土地や建築、人々の営みを歴史的に解読し、その価値を発掘して、そこからさらに水とまち、人の関係を復元しながら新たなデザインの提示に至るまでを目指したプロジェクトを実施した。テーマの発想やプロジェクトの推進は、東京スリバチ学会会長の皆川典久氏が中心的に担い、当センターにとって強力なサポートを得ることができた。2019年度は、学内だけでなく、地域や外部の方々も巻き込みながら、東京の水辺の未来を一緒に創造していきたい。

（高村雅彦、皆川典久）

講義

「フィールドワーク」

本講義は、学生を中心とする学内のブランディング事業、つまりインナーブランディングの活動である。デザイン工学部建築学科では、学部3年生に演習講義名「フィールドワーク（建築）」を設けている。学生たちが主体的に東京のまちに出て、おもしろそうなもの、価値のありそうなものを見つけ出し、実際のフィールドを通して都市や建築の歴史を考えていくのである。具体的には、地図やさまざまな史料を使いながら歴史的なまちの分析、あるいは住宅などの建物の実測調査と作図を行う。こうした作業を通じて、単に分析方法や実測の知識を身に付けるだけでなく、都市や建築の歴史的価値を見出し、その保存や再生がいかに創造的な行為であるかを理解することが目的となる。平成30年度も感動的な学生の作品が多く集まった。主に東京を取り上げたその詳細は、ホームページをご覧いただきたい。

（高村雅彦）

講義

「都市史」

江戸東京研究センター（EToS）におけるインナーブランディングを推進するために、東京のまちを対象に、街区、敷地、建築レベルで、江戸から明治、現代に沿ってその空間の変化を各時代の地図から考察する講義「都市史」を設けた。今、歴史的な都市や建築の多様な対象にあって、現代都市との関係をいかに解読し再構築するかが求められている。本講義では、デザイン工学部建築学科の学部3年が主体となり、修士課程の大学院生がアドバイザーとなって、興味のある場所を自分たちで設定する。建築と都市の歴史の相互の関係を読み解く方法を身に付け、地図作業と実際のフィールドを方法として、それを図面化して特質を表現する過程と技術を習得しながら、東京の新たな姿を創造するための基盤なる作業である。作品の詳細は、ホームページをご覧いただきたい。

（高村雅彦）

著書・報告書

著書

書名:『へんちくりん 江戸挿絵本』
著者:小林ふみ子
出版社:集英社インターナショナル
発行年月:2019年2月

書名:『HOUSING IN MODERN ASIAN CONTEXTS』
著者:北山 恒(共著)
出版社:淡江大学出版
発行年月:2018年11月

書名:『歴史REAL 大江戸の都市力』
著者:江戸東京研究センター
出版社:洋泉社
発行年月:2018年10月

論文標題:「吉原遊郭は、都市の中のもうひとつの都市だった!」
著者:田中優子

論文標題:「江戸・東京の歴史からなにが学べるのか?」
「江戸はこうして豊かになった」
著者:陣内秀信

論文標題:「江戸の人びとはなぜカッパを信じたのか?」
著者:横山泰子

論文標題:「水の聖地を歩く 隅田川以東」
「東京都心の古墳を歩く『都心』に眠る古墳の素顔」
著者:高村雅彦

論文標題:「『細粒都市』東京は、江戸に学んで新たなコンセプトを創造できる」
著者:北山 恒

論文標題:「江戸の名所は都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」
著者:小林ふみ子

論文標題:「江戸の盛り場・両国は、信仰と遊びが共存した空間だった」
著者:川添 裕

論文標題:「江戸のダム湖を歩く 千鳥ヶ淵」
「江戸の凸凹土地利用の痕跡を歩く 新宿・四谷」
「江戸市中を潤したオアシスを歩く 井の頭池」
著者:皆川典久

書名:『イタリア海洋都市の精神』(講談社学術文庫)
著者:陣内秀信
出版社:講談社(講談社学術文庫)
発行年月:2018年10月

書名:『東京の歴史5 地帯編2』
著者:陣内秀信(共編著)
出版社:吉川弘文館
発行年月:2018年10月

書名:『東京の歴史4 地帯編1』
著者:陣内秀信(共編著)
出版社:吉川弘文館
発行年月:2018年9月

書名:『江戸怪談を読む 牡丹灯籠』
著者:横山泰子、門脇 大、今井秀和、斎藤 喬、広坂朋信
出版社:白澤社
発行年月:2018年7月

書名:『立原道造 故郷を建てる詩人』
著者:岡村民夫
出版社:水声社
発行年月:2018年7月

書名:『国際都市ジュネーヴの歴史 宗教・思想・政治・経済』
著者:岡村民夫(共著)
出版社:昭和堂
発行年月:2018年6月

書名:『大江戸 知らないことばかり―水と商と大火の都』
著者:NHKスペシャル「大江戸」制作班編・陣内秀信共著
出版社:NHK出版
発行年月:2018年5月

書名:『東京の歴史1 通史編3』
著者:陣内秀信(共編著)
出版社:吉川弘文館
発行年月:2017年12月

書名:『東京の歴史1 通史編1』
著者:陣内秀信(共編著)
出版社:吉川弘文館
発行年月:2017年10月

書名:『進化する妖怪文化研究』
著者:小松和彦編 小松和彦、常光徹、佐々木高広、徳田和夫、堤 邦彦、近藤瑞木、木場貴俊、香川雅信、飯倉義之、西川貴子、大谷 哲、清水 潤、大塚英志、志村三代子、市川寛也、横山泰子、永原順子、今井秀和、安井眞奈美、郷掘ヨゼフ、朴 美暻、魯 成煥、関 泰子、王 鑫、正木 晃
出版社:せりか書房
発行年月:2017年10月

書名:『モダニズムの臨界』
著者:北山 恒
出版社:NTT出版
発行年月:2017年7月

書名:『建築的冒険者の遺伝子』
著者:北山 恒(法政大学デザイン工学部DLU)編
出版社:彰国社
発行年月:2017年8月

書名:『猫の怪』
著者:横山泰子、早川由美、門脇 大、今井秀和、飯倉義之、鷲羽大介、朴 庚卿、広坂朋信
出版社:白澤社
発行年月:2017年7月

書名:『水都ヴェネツィア その持続的発展の歴史』
著者:陣内秀信
出版社:法政大学出版局
発行年月:2017年4月

報告書

報告書名:「『風土』から見た江戸東京の珍しさ」
著者:星野 勉
主体:江戸東京研究センター
発行年月:2018年7月

報告書名:2017年度報告書『『江戸東京』という都市組織の中で「ヴォイドタイポロジー」の試み」
著者:北山 恒
主体:エコ地域デザイン研究センター
発行年月:2018年2月

論文・学会発表・作品

論文

論文標題:「HYPERMIX」
著者:北山恒、工藤徹
掲載媒体:『JA 112』(新建築社)
発表年月:2019年12月

論文標題:「住民の自伝的記憶から読み解く地域の風景―新潟市佐潟を対象に―」
著者:安達幸輝、福井恒明
掲載媒体:『景観・デザイン研究講演集 No.14』(土木学会)
発表年月:2018年11月

論文標題:「神田神保町古書店街の発生と変遷」
著者:外山実咲、田中 咲、福井恒明
掲載媒体:『景観・デザイン研究講演集 No.14』(土木学会)
発表年月:2018年11月

論文標題:「明治から新聞記事にみる外濠」
著者:福井恒明
掲載媒体:『東京人』(都市出版)
発表年月:2018年12月

論文標題:「安政期における目黒砲薬製造所の建設と地域社会」
著者:根崎光男
掲載媒体:『人間環境論集』第19巻第1号(法政大学人間環境学会)
発表年月:2018年12月

論文標題:「書籍を模擬する遊び ―『見立絵本』にかんする疑問、から」
著者:小林ふみ子
掲載媒体:『京都語文』26号(佛教大学国語国文学会)
発表年月:2018年11月

論文標題:「水の視点から読む武蔵野の原風景」
著者:陣内秀信
掲載媒体:『武蔵野樹林』第1号(角川文化振興財団)
発表年月:2018年10月

論文標題:「柔らかい共同体を支えるタイポロジー」
著者:北山 恒
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発表年月:2018年8月

論文標題:「事務所と寄宿舎が共存」
著者:北山 恒
掲載媒体:『日経アーキテクチュア No.1124』(日経BP社)
発表年月: 2018年7月

論文標題:「『にわ』をまとう在来工法の住宅とは(インタビュー)」
著者:下吹越武人
掲載媒体:『GA JAPAN 153』(エーディーエー・エディタ・トーキョー)
発表年月:2018年7月

論文標題:「コモンと地域資産が商業を変える ミレニアル世代と人口減少社会の消費を支える場」
著者:高村雅彦
掲載媒体:『日経アーキテクチュア』(日経BP社)
発表年月:2018年6月

論文標題:「『雨珠記』と正応四年の紀州由良隕石」
著者:大塚紀弘
掲載媒体:『汲古』73号(汲古書院)
発表年月:2018年6月

論文標題:「日本の広場に期待すること」
著者:陣内秀信
掲載媒体:『都市+デザイン』第36号(都市づくりパブリックデザインセンター)
発表年月:2018年3月

論文標題:「東京の歴史の壮大なパノラマ」
著者:陣内秀信
掲載媒体:『本郷』No.134(吉川弘文館)
発行年月:2018年3月

論文標題:「窓の視線学」
著者:北山 恒
報告書名:『窓学』
発行年月:2018年3月

論文標題:「再び集合へ」
著者:北山 恒
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発行年月:2018年2月

論文標題:「奇々羅金鶏=実在の艶次郎論」
著者: 小林ふみ子
掲載媒体:『山東京傳全集』第13巻月報第17回(ぺりかん社)
発行年月:2018年2月

論文標題:「失われた江戸文化のことばと表現の多様性」
著者:小林ふみ子
掲載媒体:『現代の理論』2018冬号(NPO現代の理論・社会フォーラム)
発行年月:2018年1月

論文標題:「アジア世界の〈水都学〉」
著者:高村雅彦
掲載媒体:『日中建協NEWS』第231号(日中建築住宅産業協議会)
発行年月: 2018年1月

論文標題:"Introduction:Proposing Suitogaku–Towards a Comparative Study of Cities on Water"および "Considering the Redevelopment of the Tokyo Bay Areas from the Basics"
著者:H.Jinnai
掲載媒体:Rosa Caroli, Stefano Soriani, Fragile and Resilient Cities on Water: Perspectives from Venice and Tokyo, Cambridge Scholars Publishing
発行年月:2017年10月

論文標題:Evolutional Steps toward the Post-Western/Non-Western Movement in Japan
著者:H.Jinnai
掲載媒体:Built Heritage, Vol.1, No.3, Tongji University Press
発行年月:2017年9月

論文標題:"The landscape of Tokyo as a City on the Water —Past and Present."
著者:H.Jinnai
掲載媒体:Heleni Porfyriou and Marichela Sepe, Waterfronts Revisited –European ports in a Historic and global perspective, Routledge, London and New York
発行年月: 2018年6月

論文標題:「方法としての水都」
著者:陣内秀信
掲載媒体:『フィールドとしての「西洋」を問う―建築史・都市史研究が拓く未来』(日本建築学会大会研究協議会資料)
発行年月: 2017年9月

論文標題:「日中住居論」
著者:高村雅彦
掲載媒体:『日中建協NEWS』第229号(日中建築住宅産業協議会)
発行年月: 2017年9月

論文標題:「都市東京の未来」
著者:北山 恒
掲載媒体:『地域開発』(日本地域開発センター)
発行年月:2017年4月

査読付論文

論文標題:「20世紀東アジアの都市住宅ー1950年代北京における街区計画と集合住宅の変遷から読む東京との比較ー」
発表者名:邵帥
学会等名:東アジア都市史大会・創立記念国際学術大会
発表場所:韓国ソウル・建国大学校
発表年月:2018年6月

論文標題:「庭園都市としての20世紀の東京論」
発表者名:内藤啓太
学会等名:東アジア都市史大会・創立記念国際学術大会
発表場所:韓国ソウル・建国大学校
発表年月:2018年6月

論文標題:「江戸における公儀地の論理」
著者:松本剣志郎
雑誌名:『法政史学』88号(法政大学史学会)
発行年月:2017年9月

論文標題:「産業革命前における水力産業都市・桐生の形成」
著者:堀尾作人・陣内秀信
雑誌名:『日本建築学会計画論文集』82巻737号(日本建築学会)
発行年月: 2017年7月

論文標題:「江戸の橋梁維持と武家屋敷組合」
著者:松本剣志郎
雑誌名:『比較都市史研究』36巻1号(比較都市史研究会)
発行年月:2017年6月

論文標題:「江戸の公共負担組合と大名家」
著者:松本剣志郎
雑誌名:『社会経済史学』83巻1号(社会経済史学会)
発行年月:2017年5月

学会発表

発表標題:「江戸の空間認識と地形—江戸名所図会を対象に—」
発表者名:小杉千織、福井恒明
学会等名:第14回景観・デザイン研究発表会
発表場所:長崎市民会館
発表年月:2018年12月

発表標題:「都市部における文化的景観と住民の活動—「葛飾柴又の文化的景観」を対象として—」
発表者名:大迫和己、福井恒明
学会等名:第14回景観・デザイン研究発表会
発表場所:長崎市民会館
発表年月:2018年12月

発表標題:「住民の自伝的記憶から読み解く地域の風景ー新潟市佐潟を対象にー」
発表者名:安達幸輝、福井恒明
学会等名:第14回景観・デザイン研究発表会
発表場所:長崎市民会館
発表年月:2018年12月

発表標題:「神田神保町古書店街の発生と変遷」
発表者名:外山実咲、田中咲、福井恒明
学会等名:第14回景観・デザイン研究発表会
発表場所:長崎市民会館
発表年月:2018年12月

発表標題:「歌舞伎と周辺領域ー江戸東京の怪談文化の事例」
発表者名:横山泰子
学会等名:東アジア日本研究者協議会国際学術大会　2018年大衆文化研究プロジェクト総合国際シンポジウム
発表場所:京都リサーチパーク
発表年月:2018年10月

発表標題:「江戸・周辺地域の広域支配」
発表者名:根崎光男
学会等名:法政大学江戸東京研究センター
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2018年9月

発表標題:「現代都市東京に生きる江戸の庭園」
発表者名:畠山望美、高村雅彦、内藤啓太
学会等名:日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)
発表場所:東北大学
発表年月:2018年9月

発表標題:「庭園都市江戸の多様性について-大名庭園を中心に-」
発表者名:内藤啓太、高村雅彦、畠山望美
学会等名:日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)
発表場所:東北大学
発表年月:2018年9月

発表標題:「隅田川以東における江戸市街の拡大と水の聖地ー水の聖地の意味論 その7」
発表者名:高村雅彦、加藤智也
学会等名:日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)
発表場所:東北大学
発表年月:2018年9月

発表標題:「中国建国直後(1949-1957)の住宅建築と社会主義政策の関連性ー政治都市北京を中心にー東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その2」
発表者名:邵 帥、高村雅彦
学会等名:2018年度日本建築学会大会(東北)
発表場所:東北大学
発表年月:2018年9月

発表標題:「遊興空間としての江戸東京の寺社境内」
発表者名:塩川瑞実、高村雅彦
学会等名:日本建築学会大会〔東北〕
発表場所:東北大学
発表年月:2018年９月

発表標題:「江戸における広場としての寺社境内」
発表者名:塩川瑞実、高村雅彦
学会等名:日本民俗建築学会 第45回大会
発表場所:鹿児島大学
発表年月:2018年6月

発表標題:「江戸武家屋敷の庭園の特質と展開」
発表者名:内藤啓太
学会等名:日本民俗建築学会 第45回大会
発表場所:鹿児島大学
発表年月:2018年6月

発表標題:「現代東京における庭園の継承」
発表者名:畠山望美、高村雅彦、内藤啓太
学会等名:日本民俗建築学会第45回大会
発表場所:鹿児島大学
発表年月:2018年6月

発表標題:「文政期前後の山水名所題絵入狂歌本の出版とその改題・再印ー浮世絵風景画流行の前史としてー」
発表者名:小林ふみ子
学会等名:国際浮世絵学会2018年度春季大会
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2018年6月

発表標題:「〈水都学〉のアジアから再発見する東京の可能性 Tokyo' s Potential Capacity Refound from the “Water City and Regional Studies” of Asia」
発表者名:高村雅彦
学会等名:江戸東京研究センター設立記念国際シンポジウム「新・江戸東京研究〜近代を相対化する都市の未来〜」
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2018年2月

発表標題:「水都」
発表者名:高村雅彦
学会等名:法政大学エコ地域デザイン研究センター年度報告会
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2018年2月

発表標題:「古代・中世の聖地を取り込む江戸の都市開発」
発表者名:高村雅彦
学会等名:江戸東京研究センター・シンポジウム「江戸東京の基層ー古代・中世の原風景を再考する」
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2018年1月

発表標題:「対象としての水都、方法としての〈水都学〉」
発表者名:高村雅彦
学会等名:法政建築フォーラム2017「水都学の思想とその成果の到達点」
発表場所:法政大学市ヶ谷田町校
発表年月:2017年12月

発表標題:「船場の聖地と徳川期の名所化ー水の聖地の意味論 その６」
発表者名:林 千絢、高村雅彦、加藤智也
学会等名:日本建築学会大会(中国)『学術講演梗概集』(日本建築学会)
発表場所:広島工業大学
発表年月:2017年8月

発表標題:「大阪・上町大地の城下町建設と水の聖地ー水の聖地の意味論 その５」
発表者名:加藤智也、高村雅彦、林 千絢
学会等名:日本建築学会大会(中国)『学術講演梗概集』(日本建築学会)
発表場所:広島工業大学
発表年月:2017年8月

発表標題:「都市の適正範囲ー水の聖地の意味論 その４」
発表者名:高村雅彦、林 千絢、加藤智也
学会等名:日本建築学会大会(中国)『学術講演梗概集』(日本建築学会)
発表場所:広島工業大学
発表年月:2017年8月

学会発表(招待講演:国際学会)

発表標題:「江戸東京の都市と環境の領域、そして聖地」
発表者名:高村雅彦
学会等名:シンポジウム「水系と音風景が繋ぐ善福寺池と小菅村〜土地の記憶の発掘・継承・発信〜」
発表場所:井荻会館
発表年月:2018年11月

発表標題:「中神熊野神社と水の集落調査報告」
発表者名:高村雅彦、中原裕規、大久保直輝、田中梨奈、金谷匡高
学会等名:昭島市中神熊野神社氏子会
発表場所:中神熊野神社社務所
発表年月:2018年8月

発表標題:「近現代東京の水都論」
発表者名:高村雅彦
学会等名:東アジア都市史大会・創立記念国際学術大会
発表場所:韓国ソウル・建国大学校
発表年月:2018年6月

発表標題:「アジアの水の都市」
発表者名:高村雅彦
学会等名:水都をめぐる日伊シンポジウム「水の都市と持続可能な発展 ヴェネツィアと東京」
発表場所:イタリア文化会館
発表年月:2018年6月

発表標題:「アジアの水都と江戸東京の特性」
発表者名:高村雅彦
学会等名:近代アジアにおける水圏と社会経済シンポジウム「水都から考えるアジア」
発表場所:東京大学小島ホール
発表年月:2018年6月

発表標題:“YÔKAI Watch' in Tokugawa Japan”
発表者名:Fumiko Kobayashi
学会等名:At the roots of visual Japan.Word-text dynamics in early-modern Japan
発表場所:Faculty of Asian and Midddle Eastern Studies, Cambridge University
発表年月:2017年12月

発表標題:「水の聖地と都市領域ー基層構造と祝祭、市場、名所」
発表者名:高村雅彦
学会等名:日本建築学会 建築歴史・意匠委員会 都市史小委員会シンポジウム「都市史研究の最前線『都市と大地』シリーズ 第４回『大地の表層と人びとの暮らし』」
発表場所:建築会館
発表年月:2017年12月

発表標題:“A Case Study about the Cost of Private Publication of Illustrated Kyōka Anthologies”
発表者名:Fumiko Kobayashi
学会等名:The Infrastructure of Cultural Production
発表場所:National Museum of Ethnology Leiden, the Netherlands
発表年月:2017年10月

発表標題:「新しい公共とアート」
発表者名:北山 恒
学会等名:横浜トリエンナーレ
発表場所:横浜美術館レクチャーホール
発表年月:2017年9月

発表標題:「窓の視線学」
発表者名: 北山 恒
学会等名:窓学国際会議
発表場所:スパイラルホール
発表年月:2017年10月

発表標題:「Tokyo Urban Ring」
発表者名:北山 恒
学会等名:ハーバード大学GSD会議
発表場所:ワテラス コモン
発表年月:2017年4月

作品

作品名:「K2 House」
著者:下吹越武人
掲載媒体:『住宅特集』(新建築社)
発行年月:2018年9月

作品名:「超混在都市単位」
著者:北山 恒、工藤徹
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発行年月:2018年8月

作品名:「K2 House」
著者:下吹越武人
掲載媒体:『GA HOUSE』159(エーディーエー・エディタ・トーキョー)
発行年月:2018年7月

作品名:「Peak Cottage」
著者:北山 恒
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発行年月:2018年5月

作品名:「超混在都市単位」
著者:北山 恒
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発行年月:2018年2月

その他

書評

評者名:内海皓平、堀 誠
掲載媒体:『ファインスチール』(日本鉄鋼連盟)
発行年月:2018年10月
対象著書(著者):K2 House(下吹越武人)

評者名:深尾精一
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発行年月:2018年9月

評者名:管啓次郎
掲載媒体:『日本経済新聞』
掲載年月:2018年9月8日
対象著書(著者):立原道造　故郷を建てる詩人(岡村民夫)

評者名:篠原資明
掲載媒体:『東京新聞』『中日新聞』
掲載年月:2018年9月16日
対象著書(著者):立原道造　故郷を建てる詩人(岡村民夫)

評者名:中山英之
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発行年月:2018年9月

評者名:連勇太朗
掲載媒体:『新建築』(新建築社)
発行年月:2018年9月

評者名:新建築社
掲載媒体:『住宅特集1710』
発行年月:2017年10月
対象著書(著者):『モダニズムの臨界』(北山恒、NTT出版)

評者名:新建築社
掲載媒体:『住宅特集1710』
発行年月:2017年10月
対象著書(著者):『建築的冒険者の遺伝子』(北山恒・法政大学デザイン工学部DLU、彰国社)

論文引用

引用者名:宮坂新
被引用論文(著者):江戸幕府放鷹制度の研究(根崎光男)
引用した論文等の概要:江戸周辺地域における江戸幕府の広域行政の特質は多元的・重層的であった。

引用者名:宮坂新
被引用論文(著者):「鉄炮令」と「江戸十里四方」(根崎光男)
引用した論文等の概要:江戸周辺地域における江戸幕府の広域行政の特質は多元的・重層的であった。

引用者名:山崎久登
被引用論文(著者):江戸幕府放鷹制度の研究(根崎光男)
引用した論文等の概要:幕府の鷹場による地域一体化論、再編成論を批判したもの。

引用者名:山崎久登
被引用論文(著者):近世の鷹場規制と環境保全(根崎光男)
引用した論文等の概要:幕府の鷹場による地域一体化論、再編成論を批判したもの。

引用者名:山崎久登
被引用論文(著者):江戸周辺地域における鳥類保護の諸相(根崎光男)
引用した論文等の概要:幕府の鷹場による地域一体化論、再編成論を批判したもの。

法政大学
江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

法政大学 江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies
https://edotokyo.hosei.ac.jp
問い合わせ先:法政大学 江戸東京研究センター事務室
E-mail edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp　TEL 03-3264-9682

発行:2019年1月31日